高等部　　自ら考え判断し行動する力を伸ばす授業改善

1　はじめに

高等部では、生きる力についてＫＪ法を用いて検討した。その結果、健康で基本的な生活習慣を確立し、人を愛し人に愛されるなかで自己肯定感をもち、自己選択・自己決定するためにコミュニケーション力、考えて行動する力、自らを律する力、余暇を楽しむ力、問題解決力、応用力を付けることが大事であるという意見が多く出された。特に、高等部卒業後の学校から社会へ、また子ども世界から大人の世界への移行をスムーズにすることを考え、在学中に身に付けるべきこととして、生きる力を「自ら考え判断し行動する力」と捉え、普通科では作業学習、産業科では職業を中心に授業改善に取り組んだ。

2　目的

（１）生徒一人一人の実態把握に努める。
（２）「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」を改善する。
（３）学習指導要領に則った指導内容を研究する。
（４）授業のねらいを明確にする。
（５）PDCA サイクルを活用し授業改善に取り組む。
（６）分かりやすい教室環境になるよう整備する。

3　方法

（１）生徒一人一人における十分な引き継ぎ及び観察法・発達検査等、保護者との懇談により実態把握をする。
（２）「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」について、研修会を実施し生徒・保護者の願いを受け止め、生徒の目標・支援の方法等について検討する。
（３）学習指導要領及びキャリア教育の視点に立った指導内容について研究する。
（４）単元におけるねらい、生徒の目標、ティームティーチングのあり方等、授業のねらいを明確にし改善を図る。
（５）学習指導案・評価シートを活用して、PDCA サイクルによる授業改善をする。
（６）見通しの持てる板書・掲示、ロッカー・掲示物の整理、机・椅子等の配置を改善して、分かりやすい教室環境を設定する。

4　実践内容

（１）生徒一人一人の実態把握

計画（Ｐｌａｎ）の最初は実態把握から始まる。年度初め、本校・分校の中学部からの入学生については、前担任との引き継ぎ会を実施し、中学校からの入学生については、入学前に中学校訪問を実施し、個別の教育支援計画・個別の指導計画についても可能な限り引き継いだ。また、合格者登校日に保護者と懇談し、障害の状態、支援の方法、身辺自立、健康状態、運動・動作、情緒面、コミュニケーション、家庭での学習状況、休日の過ごし方等について聞き取り調査を行った。生徒については、簡単な指示理解・運動能力検査、行動観察をした。２、３

年生についても、個人記録ファイルをもとに前担任から引き継ぎを行った。

発達検査は教師対象の研修会後、保護者への趣旨説明・承諾を得て実施した。ＷＩＳＣ－Ⅲは１９名、新版Ｋ式発達検査は９名実施した。入学前にすでに発達検査等を児童相談所や病院で実施した場合については、保護者の承諾を得て検査のデータ及び考察等を得た。２年生では、Ｓ－Ｍ社会生活能力検査を実施した。これは高等部生活の１年を経過した時点での実態把握とともに今後の支援に役立てるものである。検査の結果及び考察については、保護者懇談で説明し、今後の支援の仕方について意見交換を行った。

また、日々の行動観察は、見る、聴く、感じるを通して、生徒と向き合いながら行い、良いところ・伸びが感じられるところ、苦手なこと・嫌いなこと等支援の在り方に参考になるようなことについて把握に努めた。

（２）「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の改善

「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」作成のため、実態把握とともに生徒・保護者の願いを引き出すことが重要と考え、そのための面談の仕方についてロール・プレイングにより研修を行った。聞き取る項目は、健康・働く生活・余暇・かかわりとし、将来高等部卒業後の生活を具体的にイメージできるようにすることをポイントとした。その後、グループでそれぞれ個別の教育支援計画を下表のように作成した。

本人・保護者の願い		Ａグループ	Ｂグループ	Ｃグループ
・本人はお笑い芸人になることを希望している。実際にどうすればいいかまでは考えていない。 ・目が悪くなったら、転院した近くの病院に一人で行き治療してもらえるようになってほしい。 ・卒業後はまだ自宅で家族と一緒に生活する。自宅から通勤できるようなところに就職、スーパーのバックヤードを考えている。できなければ施設作業所に行かせたい。手先が器用に使えるようになってほしい。 ・地理的に遠いので買い物などは親と一緒に車で行くことになる。家での楽しみは、テレビやゲームをすることである。 ・情報提供してもらいたい。困ったときの相談相手は特に今はいない。	長期目標	就職を目指して、そのために必要な能力を見つける。	自分のできることできないことを理解し、適切な行動がとれたり支援を求めたりできるようになる。	通勤可能な就職を目指す。
	短期目標	働くための集中力や体力をつける。お金、時間、文字、重さなどの知識を深める。	実習や進路学習を通して自分の進路についてより具体的に考えられるようになる。	見通しが持て情報や課題等を整理する力を身に付ける。公共交通機関を一人で利用することができる。
	支援機関と支援内容	（家庭） 身の回りのことができるよう支援する。 本人と進路について話し合う。（作業所の見学） （学校） 進路に関する情報を提供する。（作業所、福祉など） （医療）眼科受診 （福祉） 困ったときに相談する。 市役所福祉課 相談支援専門員	（家庭） 手伝いや買い物などをする機会を増やす。 （学校） 進路についての情報提供する。部活動の指導 （余暇） 家の外での活動を促す。 （医療） 眼科通院 （福祉） 相談支援専門員との相談機会を設ける。 福祉施設や先輩の就職先の見学・利用を図る。	（家庭） 部屋の整理整とんをするよう支援する。 （学校） 生活の中でリーダーとして活動ができる場面を設ける。 実習や作業で自分の適性を知る。 （余暇） バスを利用して釣りに行き自分で調理できるようになる。 （医療） 目の定期検査をする。 （就労） 相談支援専門員に相談をし進路、施設について知識を深め利用を図る。

個別の教育支援計画の中で特に学校で取り組むことを基に、個別の指導計画を作成する。その際高等部では優先的な課題を設定している。生徒と保護者の願いや将来の生活を念頭に置きながら、自立活動におけるチェック表による実態把握を参考にし、全ての授業で生徒に対し優先的に取り組むべき課題を設定する。それを情報処理システムに入力するとともに印刷し、全教師へ配布して周知を図った。また、各教科等の担当者は、その優先的な課題とともに、教科における目標

も考慮し、個別の指導計画を作成した。特に生活単元学習では、各教科の目標・内容等を踏まえておくことが重要であるとの観点で教科別に記入し、評価の入力は、生徒の目標・支援の方法を見ながら入力できるような画面構成になるよう情報処理システムを改善した。また、従来のフロッピーディスクやＵＳＢメモリーの使用で複雑であったシステムを、高等部職員室内ＬＡＮを構築することにより、簡素化するとともにセキュリティレベルを強化した。ある操作をした後にＩＤとパスワードを入力すれば、生徒の個別の教育支援計画、個別の指導計画を見ることができるようになり使いやすいものになった。

（３）学習指導要領に則った指導内容の研究

指導内容表の作成については、旧学習指導要領による大南研究室作成の指導内容表や旧第三養護学校作成の各教科等の指導内容表と東京都立あきる野学園の学習内容ガイドを参考にして各教科等別のグループで研究に取り組んだ。その際、キャリア教育の視点も取り入れた。

（教科名　　職業　　）

	4	5	6
働くことの意義（か・え）	1　物を作ったり育てたりして、直接お客さんに販売し感謝されることで、働く喜びを知る。 2　簡単な製品の流通の仕組みの理解や実際に販売することから、働くことが人の役に立っていることを知るとともに、給料をもらうことによって生活できることを知る。	1　物を作ったり育てたりして、直接お客さんに販売し、感謝される等の体験を通して、働くことへの喜びを味わい意欲をもつ。 2　家族が働いていることで、自分が生活できていることに気付くとともに、働くことは人や社会の役に立つことや自立した生活を送るために必要であること等、働く意義を理解する。	1　物を作ったり育てたりして、直接お客さんに販売し感謝される等の体験を通して、人の役に立っていることを知り、自分の仕事の意味を理解するとともに、働くことへの意欲をもつ。 2　流通の仕組みを理解するとともに、働くことは人の役に立ち、社会的な役割を果たすことや経済的に自立した生活を送るために必要であること等、働く意義を理解するとともに働くことへの意欲や自信をもつ。
（仕事の実際）（は）	3　働くことに関心をもち、仕事に参加する。 4　支援を受けながら仕事的な活動を行う。 5　指示やきまりを守りながら、見通しをもって安全・衛生に気を付け作業をする。 6　ふざけたり、無駄話、よそ見などしないで仕事をする。 7　仕事の好き嫌いをしないで最後まで仕事をする。 8　合図に従って仕事を始め、作業場を離れる時には、必ず報告をする。 9　作業で分からないことを聞いたり、報告する。 10　時と場に応じた服装、動作、言葉遣いなどをする。	3　働くことを通して働く喜びを知り、進んで仕事に参加する。 4　部分的に支援を受けたり、補助具を使いながら、作業の準備、活動、片付けに参加する。 5　一つ一つの作業工程の手順が分かり、安全・衛生に気を付け仕事を成し遂げる。 6　注意を集中し、長時間正確に作業をする。 7　いろいろな仕事に積極的に取り組み、最後までやり遂げる。 8　できたことを報告し、次にすべきことを考える。 9　分からないことは指導者に聞きながら作業を進める。 10　時と場に応じた身だしなみ、動作、言葉遣いなどを適切にする。	3　働くことを通して働くことの意義が分かり、積極的に仕事に取り組み職業生活に必要な態度を自覚し身に付ける。 4　作業の準備、作業活動、片付けに自分から取り組む。 5　標準的な動作を順守し安全・衛生に気を付け円滑に仕事をする。 6　注意を集中するポイントが分かり、正確な仕事を長時間続ける。 7　どんな仕事にも積極的に取り組み、最後までやり遂げる。 8　できたことを報告するとともに周囲の状況を判断し協力して作業を進める。 9　分からないことを指導者や近くの友達と相談しながら判断し、作業を進める。 10　時と場に応じた身だしなみ、動作、言葉遣いなどを理解し適切にする。

※　岩手県立総合教育センター　特別支援教育室　キャリア教育推進ガイドブックより

職業発達課題の領域・能力　（か）かかわる力（人間関係形成能力・情報活用能力）　（え）えがく力（将来設計能力）

（も）もとめる力（意志決定能力）

実際的な力の領域　（は）はたらく力　（生）生活する力　（た）たのしむ力

（４）授業実践　普通科　作業学習(陶芸)

「陶芸製品の製作」という単元で授業改善を行った。

ア　指導のねらい

作業学習で陶芸を行うことの特色としては、①柔らかく可塑性のある材料であるので、失敗してもやり直しができ、失敗を恐れず取り組むことができる。

②はかりで重さを量る、こねる、延ばす、切る、接着する、形を整える等の工程があり、様々な技術を習得することができる。③焼成した完成品は、硬く実用に耐え、見栄えも良く、作品の裏に自分の名前の印が残るので、自分の作業内容に対して、十分な達成感を味わうことができる。

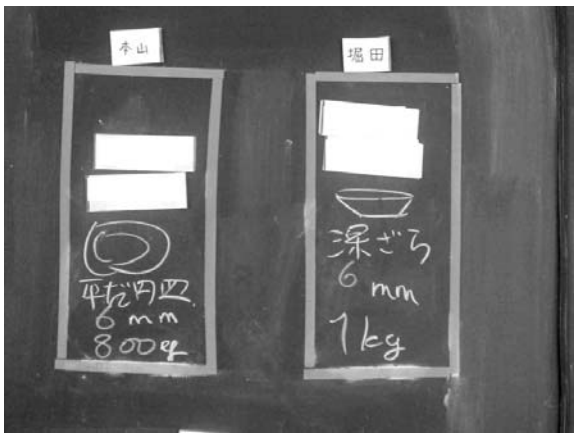
本年度の普通科陶芸班は、１０名のうち初めて陶芸班に参加する生徒が多く、自閉傾向の生徒が数名、聴覚障害のある生徒が１名いるため、環境面では本年度から、普段の制作で使う道具だけを、道具置きのコーナーに置き、教室内の黒板、机、道具の配置をシンプルにし、粘土を取る、制作する、完成品を持って行くなど一連の動線を分かりやすくした。

また、年度当初の生徒のグループ分け（３～４班）の際には、それぞれのグループ内に経験者を１名配置し、初心者の教師や生徒に「頼られる存在」とすることで、自信や自覚が深まることを期待した。制作する物については、作業を重ねて技術が向上するにつれて難度の高いものに取り組む。

これらのことを指導のねらいに位置付けて取り組んだ。

イ　改善点及び成果

（ア）分かり易く活動し易い環境



黒板を有効利用する。黒板には、普通科・産業科別の机の配置と生徒の名札をマグネットで貼り、その日に作るものと必要な粘土の重さ、粘土を延ばすときの厚みが何ミリかを明記した。授業で一番先に必要な情報は、自分が今日何を作るのか、粘土はどのくらい量ればよいのか、何ミリのたたら板（厚みを出す板）を用意すればよいのかであり、これらは作るものによって各人違う。生徒は教室に入って黒板を確認し、自分で用意できる。また、情報を共有することによって、誰かが間違えていても他の生徒が気付いて教えることができ、子ども同士の関わりにつながる。はかりの前でうまく量れない生徒がいても、すべての教師が支援できる。以前は作るものだけ板書していたので、粘土の重さや厚みの情報をチーフの教師だけが把握していたため、授業の最中に生徒やサブの教師が再々チーフに確認する場面があった。

動線を明確にする。教室の前には、粘土とはかり二組（待ち時間が少なく効率が良い）を可動式の長机の上に置き、黒板を見て必要な重さを確認して量ることができる。教室の横には、毎回使う道具（粘土板、延べ棒、たたら板、竹べら等）。教室の後ろには、作るもの別に石膏型が入ったかごを配置。各かごには必要な粘土の重さと厚みを明記し、かごの置き場所にも札をはっており、どこに片付けるか間違えなくなった。制作したものは基本的に教室の後ろの机に持って行き確認を受ける。それぞれの場所に意味を持たせるこ

とで、自分がその場所で何をするかを意識できる。

すっきりとした環境にする。授業(製作)に必要なものが見えやすいように、不必要なものを見えないところに隠す。見えるということはその情報が入ることなので、不必要なものが見えると邪魔な情報が入ることになり、意識が集中できない。また、教室内のコンテナや雑巾かけなど、さまざまなものにキャスターを付けて可動式にしたので、作業の場面によって配置を変えて、狭い空間を最大限使えるようになった。重いものも安全に一人で動かせるので、生徒の活動場面も増え、掃除も楽にできる。

特に教室環境の整備は、生徒の自発的な行動に効果があった。分かりやすい環境で生徒からの質問が減り、きちんとした環境の中で、生徒の作業態度に整然とした空気がより感じられるようになった。

（イ）必要最小限の支援

最小限の言葉掛けにする。黒板の利用により、必要な情報を生徒が自分で判断できると、その分教師の言葉掛けが減り、教室は静かになる。静かになると作業に集中し易いので、生徒は自分で考えながら仕事に黙々と集中でき、教師は注意することがないので静かな時間が続き、振り子時計の音しか聞こえなくなる。

言葉に頼り過ぎない支援をする。視覚的に分かりやすい環境で、言葉による指示、支援が減る。陶芸は粘土を扱うので、たとえ失敗してもやり直すことができ、失敗した時は、なぜうまくいかなかったのか一緒に考えれば良い。教師も気持ちに余裕ができ、時には生徒が失敗しそうな時でも黙って見守り、あえて失敗させることもできる。この場合、声を掛けないで失敗させることも支援になる。子どもが黙々と集中している時には、下手に褒めたりすると集中力が途切れるため、黙って見守るのが正しい支援。うまくできた時に毎回大げさに褒めすぎると、子どもは褒められる(評価される)ために制作するようになり、失敗を恐れるようになる。一人一人の個性に合わせて言葉掛けを工夫することも大切であるが、「さすがやなあ」とか「こらっ」も表情だけで十分な場合もある。

（ウ）働くことの意味

意欲と喜びを持たせる。自分(生徒)が制作に費やした「時間」がコップや茶碗、皿など、手で触って実感できる「物」になる。自分のはんこを押した製品は、そのまま自分の時間(人生)の証になる。うまくできていないところをどうすればよいかを教師が伝え、今日はそこが正しくできるように意識を集中させ、うまくできた時には、たとえ褒められなくても自分が一番達成感を味わっている。何度か作っているとコツが分かるようになる。前回よりも短い時間で作ることができた。自分でも上手になっていくのが分かる。どうしたら失敗し、どうしたらうまくいくのかが分かった。正しい方法、間違った方法の意味が分かった。うまくできていない友達に正しいやり方を教えることができた。うまくいかないときに友達や先生に教えてもらって乗り越えられた。嬉しかった。感謝された。文化祭で自分の作ったものを知らない方

が買ってくれた。これらの良質の経験を子どもが積み重ねられるようにする。

（エ）地域の幼稚園との交流

教えることで成長する。７年前から地域の幼稚園児との作業交流を行っている。同年代では本校の生徒が萎縮してしまうが、幼稚園児なら自信を持って作り方を教えることができる。小さな子に一対一で教えるために、作り方を完全に理解したいと思う。人に教えることの難しさ、うまく教えられた時の喜び、感謝される嬉しさを知る。この幼稚園との交流は、たった一回でも普段の授業の十回分以上、生徒は成長する。

ウ　課題

年度が変わった時、前年度の経験者の何人かが核となって初心者に教えることで新年度の作業が軌道に乗っている。しかし、細かい制作方法が残っていないので、カードのようなものにして残していく必要があると思われる。

また、以下のように教師の意識向上も必要なことである。

（ア）教師の指導観（意識）が授業に表れる。

「時間」と書いて「いのち」と読む。生徒が授業で過ごす時間は、彼らの貴重な人生の時間であり、命の一部分である。子ども（の人生、命）を大事に思うのであれば、授業で過ごす「生徒の時間」を大事にしなければならない。そのために自ら考え判断し行動する力を付けるためにも、教師が改善すべきところがあれば改善しなければならない。

（イ）時間の質を高めるために

緊張感のある「瞬間」を積み重ねる。人生や時間を細かく分解すれば「瞬間」になる。良質の緊張感ある瞬間がどれだけあったかが、時間（人生）の質を左右する。ゆえに授業時間の中で、生徒が自分の行為に意識を集中している緊張感のある瞬間を多くするために、環境の設定等何ができるかを教師が考えなければならない。

（５）授業実践　普通科　作業学習(縫製)

「小物の製作」という単元で授業改善を行った。

ア　指導のねらい

縫製作業を行うことの意義としては、主に次の３点が挙げられる。①物差しで長さを測る、裁断する、縫い合わせるなど、日常生活に役立つ様々な技術を習得することができる。②能力に応じて手縫いやミシン縫い、その他の手芸など作業の選択肢は広く、それぞれの生徒に応じたアプローチができる。③完成した製品は実用性にたけており、多くの製品を販売することで、自分の作業に対する達成感を味わうことができる。普通科縫製班では、これらの意義を指導のねらいに位置付けて取り組んでいる。

イ　改善点及び成果

今回の授業改善プロジェクトに際して、いろいろな側面から改善を行った。

環境設定については、常に整った環境作りに努め、使用頻度に合わせた道具類の保管方法や製品の展示方法などを工夫した。整った環境は、作業スペースが広く確保でき、安全で効率良く作業できた。環境整備の大切さを生徒に意識